

二〇一五年四月二〇日、本研究所以と中国国家博物館との共同研究の一環として、「倭寇と倭寇図像をめぐる国際研究集会」を開催した。集会ではまず、研究代表者である須田牧子助教（史料編纂所）がこの間の研究経過を報告し、ついで中国国家博物館の陳履生副館長から明代典籍に描かれた倭寇図像に関する報告があった（陳副館長は急遽欠席のため、中国科学院自然科学史研究所の黄栄光副研究員による翻訳・代読。続いて、岡山大学の遊佐徹教授から、「小説に『描かれた』倭寇―明清倭寇小説概論」と題し、明清期の中国小説に取り上げられた倭寇の記述や倭寇図像の紹介と分析に基づく報告があった。参加者四〇名。このうち、以下に陳副館長の報告を載せる。この研究集会の実施にあたっては、黄栄光副研究員から多大なるご尽力をたまわったことを付記して謝辞にかえたい。

（海外S科研代表／保谷 徹）

版刻の使い道―明代典籍の挿絵にある抗倭図の研究―

―『三省備辺図記』を中心に―

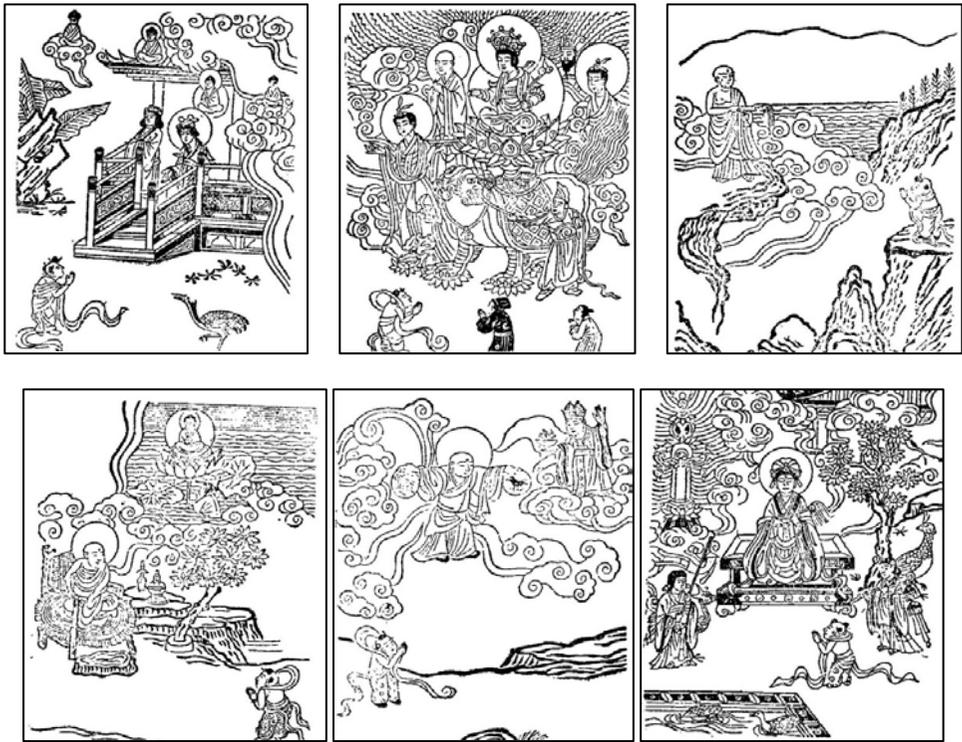
陳 履 生

明代になると、中国の絵画には色々な新しい特徴が現れてきた。しかし、美術史に関する通常の著作はまだ文人画の発展プロセスを追究するにとどまっている。そして、一般の研究者は相変わらず「明四家」の流れの解明だけに注目し、他の社会的な役割を果たした絵画のルーツを無視し続けている。そこで、認識のずれが生じるだけでなく、「抗倭図巻」や「平番得勝図巻」などのような時代を反映した作品も受けられるべき重視を得られない。典籍の挿絵に至っては、文人でもあった陳洪綬とその他文人の好みに合ったいくつかの戯曲の挿絵が重要視された外には、明代の典籍にある挿絵が絵画史における重要性が十分に認識されていないと思われる。

木版印刷は中国文化の伝播と発展において重要な役割を果たした。仏教の教義を図解し、仏像に対する崇拜にもとづいて、印刷する仏教経典

に仏像の挿絵を加えた。見える画像は文字の力を超えて教義の普及に役だった。南宋の嘉定年間に、杭州で刊行された「仏国禪師文殊指南図讚」（図一）は、『華嚴経』の善財童子五十三参という物語に、段落ごとに善財童子の参訪図を付したものである。これは仏教が中国に伝わったのちに石窟の彫刻・壁画などの芸術的手法による弘法が行われたことを物語っている。万里も遠しとしない巡礼者達にとって石窟が永劫に変わらない瞻仰の場所であるとすれば、版刻印刷されたものはポータブルな閲覧物として、室内でも学習と研究が楽しめ、より衆生の教化に適したものだと言える。元代に刊行された『孝経直解』は画像の下に説明文を付するという形式を用いて、勧善教育をより有効なものにした。一方、これらの応用・展開は逆に版刻印刷のレベルアップを促進した。

明代になると、版刻印刷は一つのピークに至った。数量が多く、内容



図一 佛国禅師文殊指南図譜

が豊富で、形式が多様多様であった。その内容は、教化、美術、記録などが並行して発展し、それぞれに長所を持っていた。「明末には、絵がなければ本がなり立たないほどであった」⁽¹⁾。版刻の具体的な応用として、沿海地域における抗倭の活動を記録したほか、抗倭関連の詳細な兵力運用、城塞の守護、敵の討伐や貿易などの仕事をよりわかりやすく表現した。それで、該当時期の典籍、絵巻にある抗倭関連の画像は歴史的にみれば、史実の記録として、いわゆる美術史の枠を越えた意味があるとみてよい。版刻は文人の自我や文人という階層の趣味から完全に離脱し、国家レベルでの時代記録に昇格され、中国古来からの「教化を成し、人倫を助ける」伝統との繋がりを示した。

「倭寇の災いは福建より始まった。内地の姦民が誘いこんだからだ。時は嘉靖二十五年（一五四六年）で、災いがまだ見え隠れするくらいで、明らかにならず、小さいもので大きくはなかった」⁽²⁾が、その後、「倭寇が大人数で来て、動もすれば千、万で数えられるようになった」⁽³⁾。倭寇がもたらした災いはまさに中国国家博物館が所蔵する「抗倭図巻」⁽⁴⁾と日本の東京大学史料編纂所所蔵の「倭寇図巻」⁽⁵⁾に描かれたように、放火、略奪と難民困窮及び離散であった。その根本的な原因は、「倭寇は」自らたどり着くことはできない。福建の内地にいる姦民の援助によるものであった。米と水を提供されたから長くいられる。貨物を提供されたから貿易を行える。案内をもらったので、奥地まで入れた。海に助っ人がいるのは、北の辺境にスパイがいるのと同様であり、スパイを取り除いてはじめて北虜を追い出せる。助っ人を厳しく取り締まってはじめて倭夷は平定されるであろう」⁽⁶⁾。「内地にいる姦民」による倭寇への援助を解決し、倭寇と戦うには、明政府による組織と軍事的な準備が必要であるうえ、俞大猷や戚継光のような英雄及び『三省備辺図記』を著した蘇愚のような名将軍も必要不可欠である。さらに、民衆全員の参加と物資

の備蓄が必要であるほか、地理と軍事関連の知識の蓄積、普及も緊急に求められた。そのため、『籌海図編』(図二)という海防・抗倭の専門書が著されたのである。

一五五六年(明嘉靖三十五年)、胡宗憲は浙江軍務総督の任期中に、倭寇の侵攻を食い止めるために、鄭若曾などを招聘し、海防に関する資料を集めさせ、十三巻からなる『籌海図編』の編集をさせた。初版は一五六二年(嘉靖四十一年)に刊行された。『籌海図編』は抗倭を語る上で重要な典籍で、中国古代における海防の百科全書であり、嘉靖期の事項を中心に明代の倭寇討伐の歴史を詳しく記載し、さらに明代以前及び明初の中日交流事情にも言及したものである。沿海地方と日本の地図(図三)、日本事略から始まり、各省の地方ごとの抗倭事蹟について述べたうえ、年表を付し、さらに倭寇の行動路線図、重要な戦役と戦没者の事蹟を記録し、「経略」をもって終章としている。

『籌海図編』は画像を中心に、文字と図をくみ合わせ地形、兵船、兵器などの形状と特徴を説明し、当時の海防と抗倭に大きく貢献した。本

籌海圖編序
 吳文學鄭子若曾崑山人也倭寇之亂崑山蓋
 屢被禍慘甚鄭子履難思憤以倭之深入由我策
 之不豫事稍平即置弗講終非完計也乃輯沿海
 圖十有二蘇郡刻行之屬有持以獻督府少保胡
 公者胡公覽而嘉異之羅鄭子於幕下俾增其所
 未備乃鄭子搜括往昔哀蒙時事凡足以却倭峻
 海上之巨坊固國家之鴻業者整而成書共十有
 三卷胡公題曰籌海圖編云因刻之會城覽者於
 是書也亦有五評焉夫海道踔遠非草步所及倭之

図二



図三

の中にある「輿地全図」、「沿海山沙図」、「沿海郡県図」、「日本島夷入寇之図」などは、具体的に詳細であり、一目瞭然である。そのうち、七十二枚の地図からなる「沿海山沙図」は、島、山、海、川、砂浜、海岸線、町、狼煙台などの記号があり、実際に参照できる沿海地形図である。それぞれの地図が繋がっており、海岸線の全容が明らかに見える。沖にある島と暗礁、海岸にあるの港湾と山や水の状況が描かれていて、沿海に設けられた衛、所、墩、台なども詳しく示している。「経略」の一項目である「兵船」には、各地方の計二十種類の兵船及び各種の兵器が記載されている。

「一切の関所と要塞の地形と内部構造、虚実向背について、時代ごとに図牒で表現した。過去の記録として、未来の参考にするためである。画像及び版刻印刷の持つ意味は、抗倭と海防を背景にした『籌海図編』で高められた。『籌海図編』はそれまで版刻印刷が果たした宗教、道徳関連の精神的な教化機能を、国家政策と民衆の生活に関わる現実的な指導機能に転化させたのである。実務的で科学的な発想にもとづいて、抗

倭の歴史と現実における問題を扱った教科書であり、事典でもあ
 る。同時代の小説・戯曲などと完
 全に異なり、『籌海図編』の挿絵
 は美しさの追求を目的としてい
 なかった。国の政治における意義を
 体現したことに、成熟した版刻印
 刷技術の伝播力を完璧に発揮した
 ことであり、同時に当時の社会に
 おいて該当技術が高度に普及して
 いた状況を表している。例えば、

嘉靖年間、倭寇が福建と浙江の沿海地方に攻めてきた時、抗倭の英雄林兆恩（一五一七—一五九八年）が『平倭管見』を政府に提言し、難民の救済に家財を尽くし、二万二千人以上の死者を埋葬した。さらに林氏は「良背法」（今日の気功療法に相当）をも創した。万曆十一年（一五八三年）、盧文輝は師匠の命令を受けて「九序内景図」を編集し、文字と図解を組み合わせて『九序心法』の解説を行った。目的は戦乱後の伝染病予防と健康維持にあり、国家の命題である抗倭のためである点では同様だといえよう。

版刻印刷技術の成熟と高度な普及は、社会現実の各方面の需要に緊密に関わっている。だから、『籌海図編』の編集にあたり、作者は多くの参考図書を持っていた。その内、タイトルに「倭」の字が入っている書籍は下記の通りである。

- | | |
|-------|------------|
| 都御史 | 李遂著『平倭事略』 |
| 都御史 | 章渙著『平倭四疏』 |
| 総兵 | 俞大猷著『平倭疏』 |
| 礼部郎 | 沈応魁著『平倭奏草』 |
| 姑蘇 | 皇甫汈著『備倭議』 |
| 五官掣壺正 | 胡国材著『平倭管見』 |
| 寧波 | 李賢著『備倭考』 |

鄭若曾自身についていえば、『籌海図編』の外に、『万里海防図論』、『四陳図論』、『黄河図議』などを著している。氏の『江南経略』はまた抗倭に関する重要な著作である。「倭寇が我が国の内地に難なく一気に攻め込めたのは、裏切り者が図面を提供し、捕虜となった者が道案内をするからである。これまで、政府は人を遣わして偵察したり、職人を募って図面を描かせたりせず、いい加減に責任逃れをしてきたから支障を来すことになった。余はこれを大変残念に思う。それ故、凡そ水陸の道路に

ついてはみずから踏査し、多くの人や書物に照らして考証し、一々明記した。そのなかで要塞を設けられるべきところについてはさらに図と説明を付し、欠失と省略を敢えてしなかった。これは後世の経略担当者がチェックすれば分かることであろう⁸⁾。『江南経略』には海防、江防、湖防及び各城の地形図が五十七枚、各関所、要所の図面が九十二枚掲載され、蘇州、松江、常州、鎮江など四府及び所轄地域の位置、重要な渡し場や見張り台、侵入を防ぐべき地勢の険しい要衝をもなく詳細に明記されている。『江南経略』に解説と画像を付けたのは将校と兵士が良く理解できる為、実戦に便利に使える為であった。可視的な地図を掲載することで、将校は図にもとづいて防備プランをたてられる。そして解説文によって図面にある要衝が目立ち、実戦に応用できる地図となった⁹⁾。一方、市場で流通していた典籍は教科書として絵師の参考にもなっていた。例えば、『籌海図編 経略 兵器』で描かれた「狼筈式」は「永寧破倭寇図」にも登場し、しかも先鋒部隊に使われたから、抜群の殺傷力を持つ兵器であったろう。このように、絵師の参考書にもなりえたという意味で、『籌海図編』を「画譜」と見てもよいのではないかと思われる。抗倭に関連する数多くの明代の版刻印刷による典籍の中で、絶大多數の挿絵は文字の補足であった。「形を残すには画より良いものはない¹⁰⁾」。当時、「読み本」の世俗化と商業化により、挿絵の役割と意味が典籍でより明らかに示された。該当時期に版刻印刷された挿絵は地図を除けば、兵船、兵器など物品の形ばかりで、抗倭に関連する事件と具体的な情状が表現されたのは現在のところ明代蘇愚の著した『三省備辺図記』(図四)の中にある五枚しかない。これらの挿絵の、抗倭や戦争を主題とした絵巻や掛軸との関わり、そして『籌海図編』など版刻印刷された典籍にある挿絵との関連性、さらに明代の一般的な版刻印刷典籍にある挿絵との芸術的な関連性は、芸術史の新しい課題であり、研究、検討すべきもの

である。

『三省備辺図記』は嘉靖四十一年（一五六二年）の進士である蘇愚の仕官生活の記録である。蘇愚は字を君明、号を興泉とし、出身は江蘇如東県であった。万暦時代に広西布政使司左布政使として活躍した。『三省備辺図記』が刊行された万暦十一年に、氏は江西布政使司右布政使になった。『三省備辺図記』の内容は、氏が隆慶元年（一五六七）泉州で兵力の備蓄に励むことに始まり、一五七九年〜一五八一年の間に苗族と後の陽洞僮人を帰順させたことに終わりを付けた。彼はこの十四年の間に、一五六九年に福建において倭寇と海賊を平定し、一五七二年から一五七三年までは広東



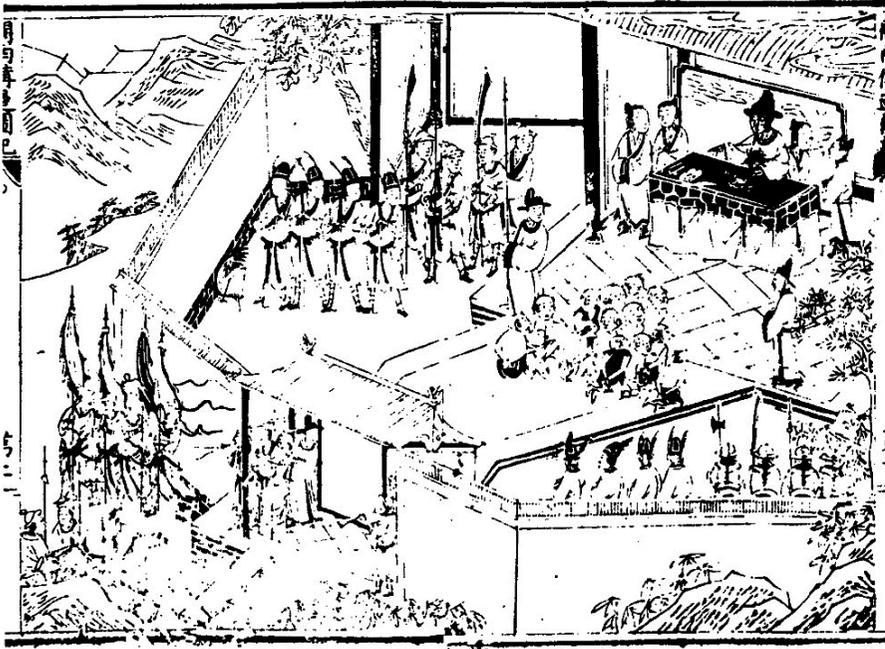
図四 《三省備辺図記》叙

で山賊を、一五七四年に潮寇を平定した。「戦の監督を二十回以上、捕虜を一万二百人以上めし取り、さらわれた者を三千五百余人取り戻し、一百九十五寨、三万三百八十九人の帰順に成功した」⁽¹⁾「蘇氏の功績は無論三省にとどまらないものである」と言われた。⁽²⁾ 『三省備辺図記』は説明一文に画像を一枚か二枚付けて、

蘇愚が指揮を執った四箇所における抗倭の戦を記録、説明した。画像と文字は互いの内容の説明になり、補い合っている。五つの画面はそれぞれ相対的に独立していて、説明文を読めば、内容にも合致している。倭寇を捕まえてからの審判、倭寇との激戦、勝利を祝い褒賞を貰う場面など、全てスケールが大きく、描写が複雑で、生き生きとしていた。全体を見ると、最初から最後まで繋がっており、倭寇を捕えるところから、冷静沈着で出撃を組織し、民兵の訓練、追撃、勝利を祝うまでの過程は、『抗倭図巻』のように抗倭という事件のプロセスを表したものと捉えられなくもないが、このプロセスは一回の戦の一部始終でなく、作者が数年間にわたる仕官生活における出来事であった。そこで、絵師は四回の戦を描く時に、蘇愚の仕官生活の代表的な場面をしっかりとおさえたうえで、同一書物の挿絵としての相互関連性を巧妙に持たせている。よって挿絵は独立しているながら互いに繋がりがあい、明代の版刻印刷典籍の挿絵がストーリー性を重視する特徴がはっきり表されている。

崇武古城は、福建省泉州市に属し、惠安県東南部から二十キロほど離れている崇武半島の南端にあり、海防の最前線として、古来から戦略要地であった。史書によると、明永樂二十二年（二四二四年）、千人余りの倭寇が大山から上陸し、殺人、放火と略奪をした。崇武の千戸であった張榮が兵士と民衆を率いてこれに抵抗し、戦死してまで古城を守った。「崇武擒倭記」の始めにおいて、蘇愚は「閩（福建）は壬戌一年（嘉靖四十一年、一五六二年）より倭寇が侵入し始め、蒲城を破った。山賊と海寇が起り、泉州の地に蔓延し、数万の官兵をもつて討伐しきれず、飢えと疫病に苦しむのを待って帰順させた」と語っている。実際、蘇愚が「丁卯（隆慶元年、一五六七年）に命を受けて泉州で兵備をととのえる」前に、崇武はたびたび倭寇からの襲撃を受けていた。⁽³⁾

嘉靖三十七年（一五五三年）、倭賊が来犯し、官軍がこれに対戦し、



図五 崇武擒倭寇図

賊が城の陥落に失敗した。⁽¹⁴⁾

嘉靖三十八年（一五五九年）三月、倭寇が城を攻撃してきた。千戸銭儲が北門を、百戸王銭が南門にて督戦し、対戦が十数日続けられ、敵は

城を落とせず退去した。

嘉靖三十九年（一五六〇年）正月、倭寇が崇武城に奇襲してきた。四月二日に、軍民は血みどろになって戦ったが、孤立無援となり、軍糧が尽きて城は陥落した。この戦では、千戸銭儲と百戸王銭が戦没した。倭寇は入城してから四十二日間略奪し、ありつただけの悪事を働いた。五月十一日、福建長官万育吾が自ら軍隊を統率して反撃し、崇武城を奪い返した。

嘉靖四十二年（一五六三年）春、倭寇が突然上陸してきた。戚継光が指揮を取り倭寇を撃退した。

嘉靖四十三年（一五六四年）、俞大猷、戚継光が仙游で倭寇を破った。俞大猷はかつて崇武で督戦し、閩所を強化し敵の防御につとめた。その威光は沿海に行き渡り、倭寇は敢えて侵犯して来なくなった。

蘇愚が「命を受けて泉州で兵備をととのえた」この年に、戚継光は崇武に来て倭寇討伐の指揮を執り、城内の高地である蓮花台に中軍台を設けた。蘇愚は「地元兵士の訓練を指揮し、春の増水時期には客兵を遣わして守らせた」。翌年、倭寇が島で大規模な造船を始め、侵攻を計画しているとの情報を得た。一五六九年（己巳）春、大将の旗さえ破損されるほどの台風被害を受け、兵船も数えきれないほど破壊された。心配した蘇愚は援軍を要求した。三月に、予期したとおりに倭寇が攻めてきたが、台風で船をたくさん沈められ、無数の溺死者を出した。残り五十数人の倭寇は上陸して崇武に向かった。のちに全員拿捕されて官衛に護送され、中に以前永寧などの衛所を破った倭寇が数人いた。このことに気付いた蘇愚は彼らに歌うように命じた。倭寇達が一斉に歌い出し、僧侶の念仏のように聞こえた。画面は蘇愚の官衛で、庭の内外に厳重に警備を敷かれ、外で戦旗が翻し、遠くには山々が重なっていく。庭の中で倭寇が縛られて跪き、両側に文官と武将や長刀を持つ武士がいる。蘇愚

は両側に使いを侍らせて机の前に端座し、「歌え」の指図を出している。挿絵はこの場面を選び、「崇武擒倭寇」という事件の核心的な内容を典型的に再現した。構成が複雑であるにもかかわらず力が溢れ、庭の内外が呼応しあい、物語のような場面を描きだした。

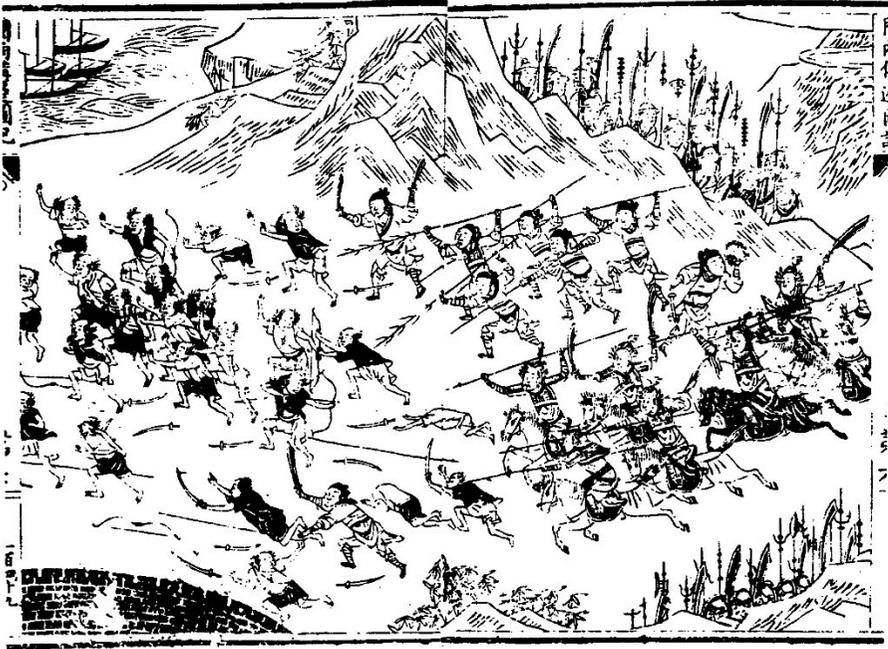
「永寧破倭寇図」と「安海平倭寇図」の二図は「永安平倭記」の内容を描いたものである。倭寇の侵攻を防ぐために、泉州の沿海五十里に多数の衛所が設けられた。嘉靖の末年に、倭奴が海上を横行し悪事を働き、諸衛所には完全な城がないほどであった。よって内地は悉くその被害に苦しんだ。倭寇が来たと聞けば、郷民は城に奔走して入り、閉門して兵隊を巡らせ固守した。倭寇は略奪しつくしてから去っていく。倭寇を殲滅しようなどと敢えて言う人はいなかった。隆慶三年（一五六九年）三月に、倭寇は崇武に侵攻し、蘇愚は軍隊を率いてこれを撃った。翌日、倭寇が帆船で永寧衛に侵攻してきた際、また兵を遣して迎撃した。倭寇が上陸して二十里足らずの地点についたところで、蘇愚は兵士に命じて突撃させ、日が暮れる直前に倭寇四十人を殲滅した。大喜びした蘇愚は、牛肉と酒で兵士たちを労い、城門を深夜になっても閉鎖しなかった。倭寇は夜に乗じて逃亡しようとしたが、蘇愚も直ぐ追手を出した。倭寇は山林に身を隠れ、やがて安海堡まで逃げて、船を入手して海へ逃げようとしたところへ、追いかけて来た官軍によって一挙に全滅され、二百人余りが死亡した。一人か二人が山の中へ逃げたが、郷民に生け捕りにされた。

上記二図の内容は、倭寇が崇武に侵攻してから、永寧を経て安海まで連続した戦であった。戦の場所は永寧と安海の二ヶ所であったので、一つの画面でそのプロセスを表現できなかった。そのため、製作者は常规を破り、二枚の絵で前後関係のある二つの戦を表現した。前者は永寧で倭寇を迎撃する場面であり、後者は安海で倭寇を追撃した場面を表した。



図六 永寧破倭寇図

まるでコマ絵本のように、別々の画面で異なる時間と場所で起きた迎撃と追撃を描き、更に説明文を添えて、事件の全貌をイメージ化して見せている。二図の違いは、タイトルにある「破」と「平」の字にある。破

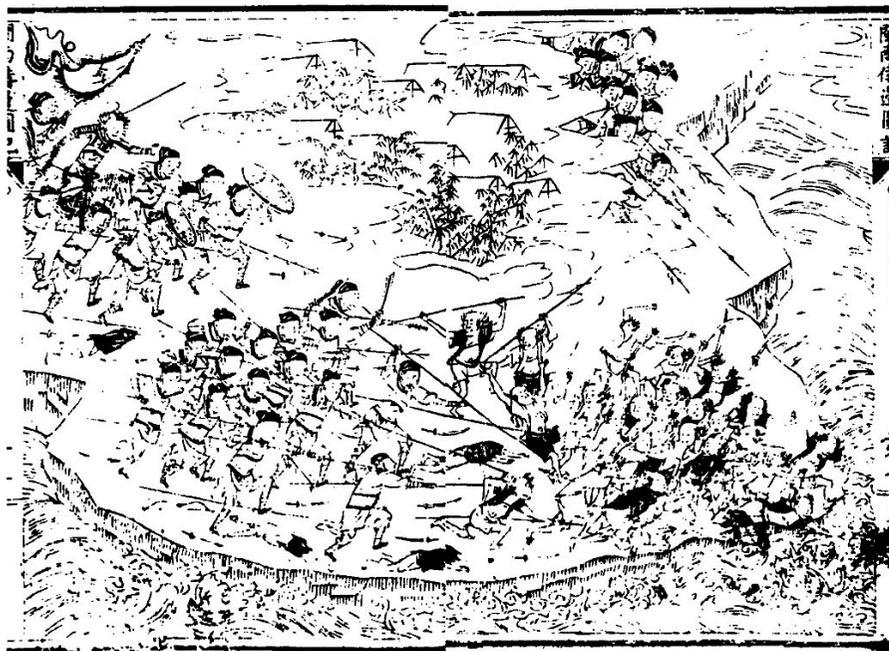


図七 安海平倭寇図

とは迎撃のこと、平とは殲滅のことである。「永寧破倭寇図」は遠方の永寧城を背景に、蜿蜒と続く山脈を越えて倭寇の上陸地点から二十里足らずのところまで行った官軍と兵士たちは画面左下の倭寇を迎え撃ち、

倭寇は大敗し、死体、刀と弓などの武器をいたるところに残した。明軍は柄の長い武器を持ち、倭寇は双刀を用いた。画面の大部分が明軍に占められ、勢いが猛々しい。片方の倭寇も頑強に抵抗している。この戦で倭寇を破った後、続く「安海平倭寇図」では、左下の城壁を背景に、左上の海辺の船を遠景にし、倭寇が海から逃亡しようとした戦の背景をはっきり表している。画面の戦闘シーンは「永寧破倭寇図」によく似ている。二図には、乗馬していた明軍が戦闘部隊の後に続き、遠方から来た援軍だと推定してよいであろう。黒装束の倭寇と白衣を着た明軍は、文字通り白黒（善悪）がはっきりしている。二図が描いた戦闘の激しさは、文字ではいい表せないものであろう。

倭寇襲来後、福建の役人は、往々にして他所から兵士を募ったが、兵士の給料を税金で賄い、非常に高くついた。政府は地元の人々を使えないものだと考えて、兵士の訓練を最初からしなかった。蘇愚が泉州に着任してから、戸籍に基づいて民兵七百人を募集したが、その半分ほどは年寄りかひ弱なもので、給料がもらえないから騒擾を起こして住民に迷惑をかけていた。そこで蘇愚は老弱を除隊して、各地方に兵士の給料を確保するように命令し、よって民兵たちは期日通りに給料を貰えるようになった。そして、蘇愚は開元寺などの寺に行つて教員を募集し、民兵に兵法を教え、時ごとに武亭で演習させた。蘇愚は「私が兵士を訓練する目的は倭寇の殲滅にあり、これは地方のためにやることで、ただ給料を費やしているだけではない」と彼らを戒め、「一年過ぎて、兵ははたして戦えるようになった。人はみな兵が精鋭で使えるものだといった」。隆慶三年（一五六九年）の春、倭寇が侵攻してきた際、蘇愚は張奇峰に兵士を率いて迎撃するように命じた。兵士たちはそれまで倭寇を見たこともない上に、倭寇は海洲にいる。そのため、蘇は兵士達に慎重に行動し、夜に乗じて島へ行くように言いつけた。結果として、海洲の



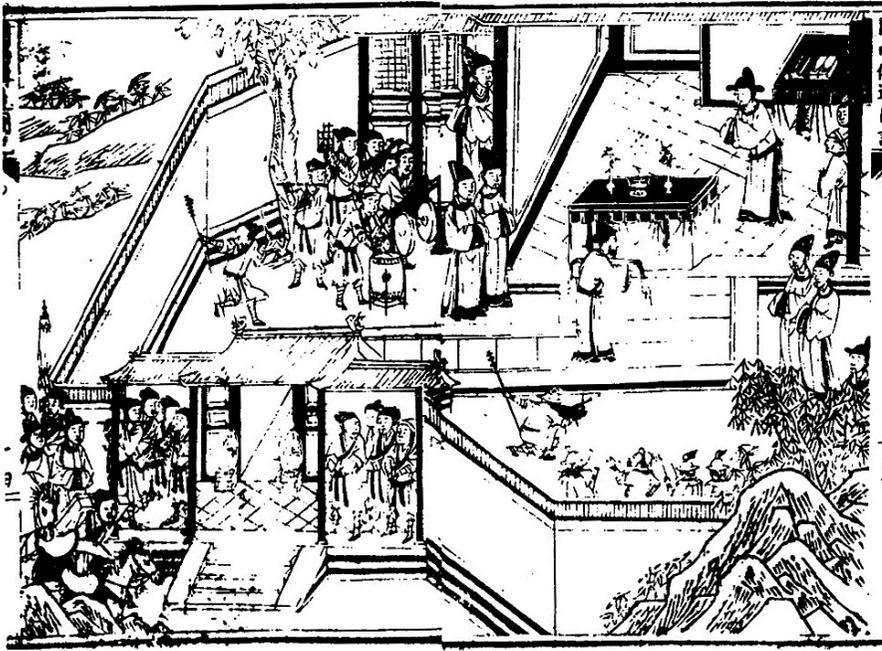
図八 練兵平倭寇図

戦いでは、倭寇の首を百六以上取り、張奇峰は倭寇の頭領を射殺し、「全勝した」のである。常識的には、「練兵平倭寇」という主題には兵士の訓練を描いて、蘇愚の軍事面における寄与を讃えるはずであるが、絵師

は敢えて海洲の戦を選んだ。無論これは賢明な選択であり、海洲の戦を兵士の訓練の最終成果として取り上げ、蘇愚の沿海地区における抗倭で果たした役割を表している。画面の下半分から右側までは海洲をめぐる沸き立つ波である。民兵は画面左上から右下にいる倭寇を攻撃し、圧倒的な勢いで倭寇を崖まで押しやり、倭寇の数人が海に落ちていった。右上の隅に弓矢を持って倭寇を射殺している兵隊が描かれていて、これは同僚張奇峰の功績を描いているものであろう。

隆慶三年（一五六九年）春、督府から給料を請求した蘇愚は故郷に戻って母の世話をするための支度をしたが、倭寇が急にまた侵犯してきて、警報が絶えず鳴らされた。蘇愚は「日夜戦の監督をつとめ、続々と三百人以上を拿捕、斬首した」。永平、安海、泉州の戦いを経て、六月に海が戦鬨なしの状態になった。蘇愚は海道管理官を兼任して、八月から十月初まで漳州を巡視し、十一月にやっと実家に戻って母親の誕生祝いを行い、数日後にまた寒さを凌いで北上した。これほどの激務の中でも母親への孝行ができたのは、倭寇を撃退したおかげであると蘇愚は考えた。その後、隆慶五年（一五七一年）の春、倭寇討伐の功績によって、蘇愚は広州の任地で恩賜の十両を頂戴し、同僚の張奇峰と王済も軍功で栄転を遂げた。

「崇武擒倭寇図」に似て、「平倭寇欽賞図」（図九）も官衙のなかを描いている。異なる点は、広州の官衙は崇武のそれよりかなり格式の高いものになったことである。画面からでも聞こえてきそうなめでたい太鼓や音楽の中で、ご褒美を頂戴する蘇愚は、恩賜金を送ってきた官員とお辞儀を交わしている。両側には文官が立ち、左脇の部屋の前に、各自の楽器を手にした楽隊が列をなしている（図十）。脇部屋から身をのり出して並んでいる女性もいるが、おそらく妻であろう。門の外にも、文官と楽隊が並んでいる。左下の隅に一人が馬に乗って疾走してきているが、吉報



図九 平倭寇欽賞図

を伝える使者だろうと思われる。
抗倭の功績を持つ戦略家として、蘇愚の著書『三省備辺図記』はその戦略思想を反映している。例えば、倭寇は「波濤の中をくぐってきて、



図十 《平倭寇欽賞図》部分

飢えていて疲れている。この時は一番殲滅しやすい。しばらく休むと略奪をして飽食し、険しいところを占拠してしまうと、ほとんど勝つことができなくなる」から勇敢に迎撃すべきである。そして、地元の民兵を訓練することを提言している。明代の戦術に関連するものといえば、「永寧破倭寇図」と「安海平倭寇図」に描かれた岩の陰に待ちぶせする兵士が、「抗倭図巻」で言及された「設伏」に似ている。無論、一部の内容は文字による表現に適しているが、画像では表現しづらい、画面でまったく表現出来ないものさえある。しかし、絵は直観的で具体的なものであり、大量の文字の表現に代わるだけでなく、それを超えることも出来る。「三省備辺

図記」は文字と絵の両方の長所を用いて、蘇愚の抗倭の功績を表現した。記録という機能をもつこのケースは明代の版刻印刷においても特別な例であり、明代版刻印刷画像の分類を豊富にした。記録という役割を果たした版刻印刷が明代社会に貢献し

たことも物語ってくれた。確かに、記録という機能を持つ版刻印刷として、『三省備辺図記』は弘治十五年（一五〇二年）に刊行された『便民図纂』¹⁵にある「耕織図」ほど代表的なものでもなければ、「耕織図」が明代の呉地域における耕織の風景を見事に表現した素晴らしさも持っていない。しかし、『三省備辺図記』は記録した明代における「外患」という国の重要事項の持つ意味で、他の作品を凌駕している。

ここで注意したいのは、明代における豊富で多様な版刻印刷典籍の内には、經史子集など儒学の古典的な作品もあり、大量の類書や自然科学技術関連の本もあることである。多種多様な通俗的な書物、例えば画譜、酒牌、箋譜、遊記、詩詞、文集、小説、戯曲の脚本などもある。版刻出版がつくりあげた商業的な消費は、巨大な市場を形成していた。それに対して、蘇愚の『三省備辺図記』のような自分の仕官事跡を内容とした印刷物は明らかに通常の消費対象でなかった。しかし、それは個人史であるとともに抗倭の歴史を補足するものであり、その挿絵は明代の版刻印刷における特別な意味を持つものである。絶対に看過できないものがある。

勿論、蘇愚が自分の仕官事跡を著書にし、編集し、挿絵を入れ、版刻印刷したのは、当時の社会からかけ離れた個人的な行為ではなく、人から影響されたり人に影響を与えたりした行為である。それで、このような個人出版は、明代中期以降、版刻印刷がピークに達した促進要因であるかも知れない。しかし、『三省備辺図記』が現在では孤本であるように、伝播の中で相当多くの版刻印刷物はもう知られざるものとなった。ただ当時の社会において『三省備辺図記』は決して珍しい作品ではなかったと推察できる。

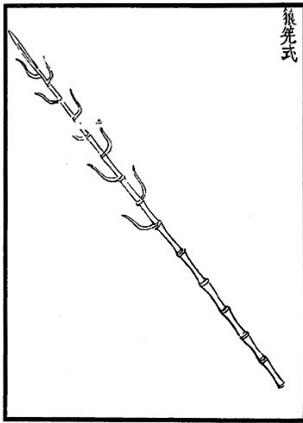
同時期の抗倭典籍に比べて、『三省備辺図記』は完全に異なる中心内容を持っている。しかし版刻印刷の時代の流れにあつて、『三省備辺図記』

は他の作品と画面の表現が似ている所が多く見られ、ある種特別な関連性をもっているといえよう。互いを見比べればその時代の特徴がよく分かる。例えば「永寧破倭寇図」



図十一 永寧破倭寇図

の二図を見ると、両方の先鋒部隊には「狼筈式」という兵器を持つ兵士が描かれている。「狼筈式」という兵器は『籌海図編』の「経略 兵器」に掲載されただけでなく、戚繼光の著した『紀効新書』にも特筆されている。「狼筈」は「長さ一丈五尺、重さ七斤、竹と鉄の二種類あり、付け枝は必ず九層、十層あり、十一層あれば最も素晴らしい」（図十二）。この兵器は「形が大きくて重たいので、持って移動しにくい、ほかの兵器のように出入りしやすくない、利器でないようだ」から、「この兵器をめたに使用しない¹⁶」。しかしながら、戦場ではめったに見掛けないこの兵器は、戚繼光の著書には「習法」の図があわせて六枚あり、使用方法を詳細に説明している。「狼



図十二 狼筈式

筈」は大きい、重い、移動しにくいという特徴があつて、地上戦にしか適用できず、故に「抗倭図巻」には登場しなかった。これより、明代の戦では、水上と地上の兵器が異なることがわかる。そして「永寧破倭寇図」が表現した二回の地上戦ではめつたに出番のない「狼筈」が登場していることから、並大抵の戦でないことがわかる。このように、画像から事件を見ると、文字だけで足りない部分がある程度補足できている。もつとも、各典籍にある史料をつなげて考えることは明代軍事史の研究においても重要な意味を持つている。

『三省備辺図記』にある抗倭画像は、同時代の絵巻「抗倭図巻」や「倭寇図巻」と異なる。「抗倭図巻」と「倭寇図巻」は文人のスタイルで文人のセンスを表現している。また、『三省備辺図記』は「太平抗倭図」とも違う。「太平抗倭図」は民間的な描き方で時代の流れの中にある文人のセンスを表現しようとしたものである。同じ明代のものでありながら、この違いは、基本的に工具と材料の伝統的な特性によるものであった。工具と材料の違いは、版刻印刷されたものは最初から典籍の挿絵であり、厳密に言えば独立した絵画とはいえない。ある意味では文字に頼り、或いは文字の補足になる。このような画像は文字説明ができた後に

生まれるもので、画家が文字に対する理解に基づいて画面を構想したものである。このような特徴があるから、「抗倭図巻」のように時空を越えて一つの事件の一部始終や或いは主な過程を表現するのは、『三省備辺図記』

にある抗倭画像に出来ないことである。逆に連続的な画面で異なる時空で起きた事件を表現し、一枚の絵で一つの事件の瞬間を描きこむだけでよい。それで「抗倭図巻」のように、異なる場面の関連を考えて、上手く繋げていく処理を必要としない。民間的な「太平抗倭図」でも、細部の取り扱ひの多くは民間絵師のレベルを上回っている。それに比べれば、『三省備辺図記』の倭寇図は典籍の挿絵として、そもそも基本となる頁のサイズから、連続した雄大な画面構成は無理である。そこで、絵本のように時間と場所に特定な情景を表現するしかない。更に、明代において、版刻が既に産業化して、民間の絵師と彫師の審美眼と造形力は陳洪綏ほど高くないにもかかわらず、文化の主流である文人趣味に憧れていて、それを理想として追求し、ときには名を偽るというやりかたで主流文化に認めてもらおうとした。「倭寇図巻」に「仇英」という署名があるのはまさにそのためである。しかし、実際に民間の絵師と彫師は文人趣味とそのセンスをなかなか真似できず、版刻の制約も加わり、緻密で味のある画面がなかなか出来ないものである。

逆に、版刻印刷に諸々の制限があつたからこそ、『三省備辺図記』にある抗倭画像はそのあるべき方式で、版刻印刷の特徴を生かして絵と文字——図と図記の関連性を表現した。例えば、「崇武擒倭記」の後に「ほどなくして、倭寇がまた襲来した。余が兵を督して永寧衛と安海堡と同安洲でこれを打ち負かした」と説明し、次の三つの戦へと繋げていき、もって連続した物語とした。続く「永安平倭記」では最初に王済が援軍を率いて崇武で倭寇の残部を追撃したことを述べて、前の「崇武擒倭記」との関連性を示した。このようなコマ絵本のような表現手法は、早期の敦煌壁画にも見えるものであり、明代にいたると絵本に似た版刻印刷の典籍に発展した。これは二十世紀前半から新文化の形態を持つ「連環画（絵本）」の雛形だと言えよう。

客観的に言うと、作者が遍歴した福建、広東、貴州は版刻印刷の中心地でも、文化と商業上の重要都市でもない。だから絵、版刻と印刷のいづれにしても、そのレベルは金陵、新安、杭州、蘇州の比べ物にならない。絵の描写と版刻のレベルは記録したい事件の表現に影響している。五枚の挿絵とも雄大な場面と豊富な内容がある一方、主要人物に対する精細な描写がなく、天啓年間（一六二一年—一六二七年）に呉興凌濛初刊本の『西廂劇』や、崇禎十三年（一六四〇年）呉興凌濛五刊本の『西廂記』ほどの精彩さはない。陳洪綬が描いた崇禎十二年（一六三九年）刊本の『張深之先生正北西廂秘本』のような名作にはもつとおよばない。しかし、『三省備辺図記』は粉本を持たない独立した創作で、文字の内容を元に構想し構図や人物表現を考え、審美にかなった白と黒の対比を設け、疎密をアレンジし、全てがかなりの水準に達していた。明代におけるこの種類の画像の代表作とみてよいであろう。

明代のハイレベルの版刻印刷の出版物は、明代における多種多様な文化が高度な発展をとげた重要なサポート要因であった。版刻がもつ記録機能は、明代の豊富な歴史と文化の積み重ねに大いに役立った。マクロの『籌海図編』とミクロの『三省備辺図記』によって、版刻印刷の社会的意義と文化的価値が示されている——「誠に書齋に香を添え、茶肆に閑を加えた。佳人が遊びに出かける際、手に繡像をもち、舟や車の中ではこれを貴重品のよう大切に扱っている。医者が術をもって、典籍の篇章を検索して、図を求めて患者に示した。凡そこれらの百事について、正に彫工が剗削の力を得たことによる。万年に徳を積み、圣贤の伝道や授経に劣らないものであらう」⁽¹⁷⁾。

[注]

(1) 章宏偉『明代木刻書籍版画芸術』、鄭州輕工業学院学报（社会科学版）、

二〇一二年第六期。

(2) 『籌海図編・福建倭変記』、嘉靖四十一年刻本、『中国兵書集成』第十六冊、解放军出版社、遼瀋書社一九九〇年。

(3) 『籌海図編・福建事宜』、嘉靖四十一年刻本、『中国兵書集成』第十六冊、解放军出版社、遼瀋書社一九九〇年。

(4) 陳履生『紀功与記事·明人「抗倭図卷」研究』、『中国国家博物館館刊』、二〇一一年第二期。

(5) 須田牧子著 彭浩訳『倭寇図卷』再考、『中国国家博物館館刊』、二〇一一年第二期。

(6) 『籌海図編 福建事宜』、嘉靖四十一年刻本、『中国兵書集成』第十六冊、解放军出版社、遼瀋書社一九九〇年。

(7) 茅坤『刻籌海図編序』、嘉靖四十一年刻本、『中国兵書集成』第十六冊、解放军出版社、遼瀋書社一九九〇年。

(8) 鄭若曾『江南経略』、『四庫全書』、上海古籍出版社一九八七年。

(9) 宋澤宇『鄭若曾「江南経略」研究』、安徽大学修士論文二〇一三年。

(10) 晋・陸機、唐・張彦遠『歴代名画記』、『中国書画全書』、第一冊、上海書画出版社、一九九三年。

(11) 蘇愚『三省備辺図記引』、『三省備辺図記』。

(12) 鄒爾瞻『三省備辺図記叙』、『三省備辺図記』。

(13) 注(14)以外の資料は全て泉州歴史網 <http://qzhistory.cn/>による。

(14) 『説史方輿紀要·卷九九·福建五·泉州府·守御崇武千戸所』。

(15) 明・鄭璠『便民図纂』（中国古代版画叢刊）、中華書局、一九五九年。

(16) 一五 戚繼光『紀効新書』、明万曆十六年李承勳刻本、中国国家図書館編『原国立北平図書館甲庫善本叢書』、第四八五冊、国家図書館出版社、二〇一三年。

(17) 明・朱一足跋『七種争奇』。

本研究集会は、基盤研究S「マルチアークイヴァルの手法による在外日本関係史料の調査と研究資源化の研究」(課題番号二六二〇四〇二、研究代表者：保谷 徹)の一環として、その経費の一部も使用して行なった。